会派研修報告書

日　　時	平成１７年１１月９日（水）～１１月１１日（金）			
名　称	会派研修	場　所	１日目　長野県上高井郡小布施町 ２日目　長野県下伊那郡下條村 ３日目　石川県金沢市	
出　席	栗東市民ネットワーク 田村隆光・宇野哲・国松篤・伊藤矢守司　　以上４名 小布施町･･･呉羽勝正（生活支援ハウス施設長・ア･ラ小布施事務局長） 下條村･････宮澤吉博（振興課長）・串原良彦（総務課長） 金沢市･････針野衛（産業局観光交流課課長補佐） 井上淳（産業局観光交流課担当課長補佐） 一ノ宮直之（議会事務局主任主事） 宮田敏幸（議会事務局担当課長）			報　告 田村

【研修目的】

地方分権時代におけるまちづくりとして、単に“合併”に頼るまちづくりではなく、また国の「三位一体の改革」の断行による補助金や地方交付税の削減にも負けず、住民の積極的な参加と工夫によってその地域が持つ歴史的遺産や文化を守り、独自の政策によってまちづくりを進めている「自立する自治体」を視察し、当市の活性化に活かすことを目的としている。

【初日　小布施町】

【基本ＤＡＴＡ】

■位置・気候

長野県北部、長野盆地（通称善光寺平）の北東に位置し、全地域は松川扇状地末端に広がり、北西に緩く傾斜。東部は高山村に、西部は千曲川を隔て長野市･豊野町に、南部は松川を隔て須坂市に、北部は篠井川を隔て中野市に隣接している。

気候は内陸性気候で寒暖の差が激しく、最高気温は３５度前後に達し最低気温はマイナス１０度前後にまで下がる。

■人口

３，２６４世帯
１１，４６０人（高齢化率２１．６％）

■面積

１９．０７ｋ㎡

■主な産業

農業･観光

【視察報告】

■人口約１万１千人のまちに、年間１２０万人もの観光客が訪れる小布施町。その仕掛けは何かを探ってみた。

▲北斎館

＊まちづくりのきっかけ

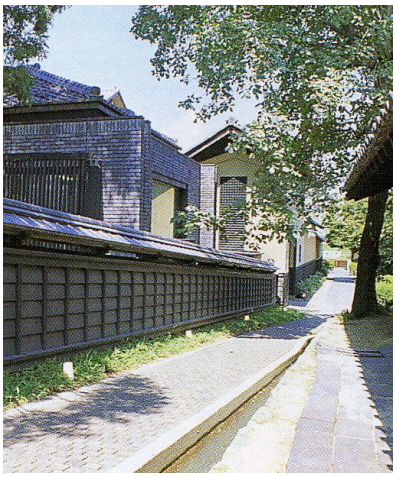
小布施町に年間１２０万人もの観光客が訪れるようになったのは、平成９年ごろからで、そのきっかけとなったのが昭和５１年に開館した「北斎館」の建設だったという。

平成元年に町長に就任された唐沢町長が「外はみんなのもの、内は自分のもの」をテーマに「うるおいのある美しいまちづくり条例」を平成２年に制定し、環境デザイン基準に添った建物の新築や増改築、広告物の撤去・改修等に表彰や助成制度を開始し、昔ながらの風情を生か歴史ある建築を再生していこうという修景事業がスタートした。

▲小布施国際音楽祭の風景

＊町全体を美術館に

北斎館の建設後、町中に美術館、博物館などが半径２ｋｍ以内に１２の文化施設が存在。



▲栗の小径

＊住民が主役

唐沢町長は、まちづくりの主役はあくまでも住民であり、行政は強力なサポーターと位置付け、市民のアイデアを十分に生かすことに心がけている。

竹下内閣時代の「ふるさと創生交付金」の使途を、フランスのアンジェ地方を中心にしたヨーロッパへの定期的な視察で、参加した住民に一人２０万円の補助金を支出。住民参加のまちづくりを、人づくり（人的投資）から始めた。

＊㈱ア・ラ小布施の設立

りんご、栗、北斎、町並み修景などをキーワードに、幸福感を持って暮らせるような成熟した生活文化を持つ町にしたいという想いから、第３セクターの株式会社「ア・ラ小布施」を設立し平成７年から事業を開始し、プチホテルの経営やガイドセンターの開設、喫茶店経営や地元商品の販売、そしてイベントの企画など１３の事業を展開し、まちづくりに寄与している。特筆すべきものは、小布施国際音楽祭の開催や北信濃小布施映画祭などの開催などその活動は国際的にもなっていることである。

＊花づくりの取り組み

住む人の快適さや訪れる人を歓迎するため、花による美しい景観や環境づくりを目的に、昭和５５年に町内の２８自治会に「花づくり委員会」を組織。その後、平成４年に花の情報発信基地「フローラルガーデン小布施」を開園。平成６年に花のまちづくりコンクールで、市町村部門最優秀賞の「農林水産大臣賞」を受賞。また平成８年には花の生産基地「おぶせフラワーセンター」を竣工。そして平成１２年には「オープンガーデン」を開設し、６０件ほどが参加。

さらには、カナダのコミュニティズム・イン・ブルーム主催による花の国際コンクールで「特別賞」を受賞するなど、「花のまち小布施」としても観光客には定着している。

＊６次産業の振興

小布施町では、地元産の特産物を新しい食文化に発展させようと農産加工品の開発や観光と結びつけた産業として、１次産業×２次産業×３次産業の６次産業の振興を推進中。

■感想

今回の小布施町の視察に協力していただいたのは、㈱ア・ラ小布施で事務局を担当されるとともに小布施町生活支援ハウス施設長でもある呉羽勝正さんという方で、唐沢市長が「まちづ

くりは人づくりから」を言われているそのままの人柄であった。小布施町のまちづくりについて親切丁寧に説明をしていただいた。

小布施町の町並みは、調和良く整備され、まちのいたるところに花壇やプランターに色とりどりの季節の花が植えられ、観光客の心を和ませてくれていた。

また、“栗の小径”と呼ばれている道には、住民のアイデアによる小布施名産の栗の木のブロックが敷き詰められていた。

北斎館にも立ち寄ったが、北斎館には日本で唯一、葛飾北斎の肉筆画を展示しており、感動を覚えた。

小布施町は、約４０億円という極めて小規模の一般会計予算ではあるが、名物の「栗菓子」を商品としている業者（１０社）が独自に３．５億円を拠出し、まちづくりの資金にしているなど、住民参加が大きくまちづくりに貢献しているため、美術館や博物館などの施設も多いが、管理は行き届いており整然とした町並みを保っていた。

呉羽さんは、「うちのまちではインフラ整備はほとんど終了した。だから合併はしなくてもまちは運営できる」ときっぱり。「合併ありき」ではなく、まさに自立の道を進んでいる小布施町であった。

【２日目　下條村】

【基本ＤＡＴＡ】

■村の沿革

明治２２年４月１日　睦沢村、陽皐村が合併し、下条村となる。以後、１１６年単独村として今に至る。

■位置・地勢

長野県の最南端の下伊那郡のほぼ中央に位置し、飯田市街や中央道飯田インターから時間距離にして約２０分の距離にある。（平成１９年三遠南信自動車道天竜峡インターが供用開始　インターから７分）

■人口

１，２６０世帯　　４，２１５人

（高齢化率２８．３％）

■面積

３７．６６ｋ㎡（山林 26.12k ㎡・耕地 4.39k ㎡・宅地 1.15k ㎡）

■産業別就業

第１次産業	第２次産業	第３次産業	総計
６１９人（27.0%）	７１９人（34.5%）	８８４人（38.5%）	２，２９４人

【視察報告】

■下条村は、まちの道路舗装工事や水路補修などを地域の人が手弁当で行う「資材供給工事」が行われており、その実態について視察した。

＊資材支給工事

「資材支給事業」とは、地域住民の生活環境を整備するために、住民自らが施工する工事に関し、村がその資材を支給するというもので、村道整備（受益者３名以上の舗装、敷き砂利、

側溝布設、横断工、甲蓋、グレーチング他）や農道整備（上記に同じ）、水路整備（受益者３名以上の土側溝の整備、漏水箇所の整備、取水施設の整備他）に限られている。

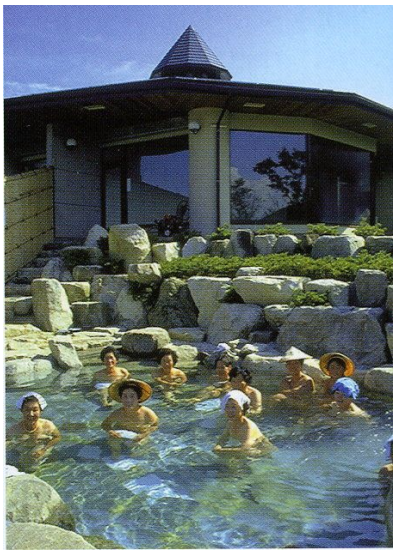
また、重機等の借上げ料も一定村の負担となっている。

年間予算としては、約２千万円から３千万円ほどで、平成１４年にスタートし、年間約８０件の申請がある。この制度を導入してから「何でも村に頼ろうとする住民意識が変わった」との事。

▲土日になると村のあちこちで住民が農道等の整備をしている

＊普及率９６％の合併処理浄化槽事業

全国の町村が取り組む下水道事業を下條村は取り組まず、負担の少ない合併処理浄化槽を選択。普及率は９６％を超え、下水道で４５億円と見積もっていた生活排水事業費は、合併浄化槽に取り組んだことで６億３千万円に収まった。


▲コスモスの湯

＊徹底した行財政改革　２０年先まで基金の積み立て可能

１９９６年に５３人いた職員を３７人（内保育士１０人・保健師２名）に減らし、人口千人当たりの職員数は８.９１人と全国平均の約半分に。人件費率も１５.３％と極めて低い。

また、収入役を廃止し、教育委員会も村長直轄とし教育長を置かないなど、自主財源は少なくても徹底した行財政改革によって地方交付税が減っても２０年先まで基金を積み立てられるという。

平成１７年度の基金残高は、２４億８３６０万円に上っている。

＊長野県下１位の出生率を支える健全財政

下條村は、出生率（一人の女性が生涯に産む子どもの平均数）が１.９７と全国平均の１.２９を大きく上回り、この数字も年々伸びている状況にある。

その秘策はというと、平成９年から若者定住村営集合住宅の建設をはじめ、幼児から中学までの医療費が無料という施策にある。

▲道の駅

村営住宅は、集合住宅が８棟、そして一戸建ての住宅を含めると１６８戸になる。部屋の広さは２ＬＤＫで約６３平方メートル。家賃は３万６千円と格安。隣りの飯田市で同じ条件の部屋を借りようと思えば、倍の家賃になるという。

また、下條村では子育て支援として子どもの医療費無料化を段階的に拡充し、０４年度からは中学生まで広げた。しかも全国どこの病院にかかっても適用されるという。

下伊那郡内では過疎化・高齢化が進んでいる町村が多く、かつては下條村も同じ。６５年に４５００人を超えていた人口が９１年には３８００人台に減ったという。

９０年から若者定住促進住宅の建設を始め、昨年は３５年ぶりに４２００人の大台を回復。全人口に占める若年（１４歳まで）の割合が１７％と、県内で一番子どもの比率が高い村になっている。

▲医療･福祉の総合健康センター

この施策を支えているのが、極めて健全な起債制限比率であり、１.４と長野県下１位を誇る。

■感想

「資材支給事業」を目的に視察に行ったが、思わぬ副産物に出会った。
それは、前述したように「福祉施策の充実」と「徹底した行財政改革」の断行である。

このまちでも、「合併はしない」と自立の道を選び、独自でまちの活性化について取り組んできた。その施策の一つ一つが、住民ニーズとマッチし尚且つ住民意識の高揚につながっていることには驚いた。

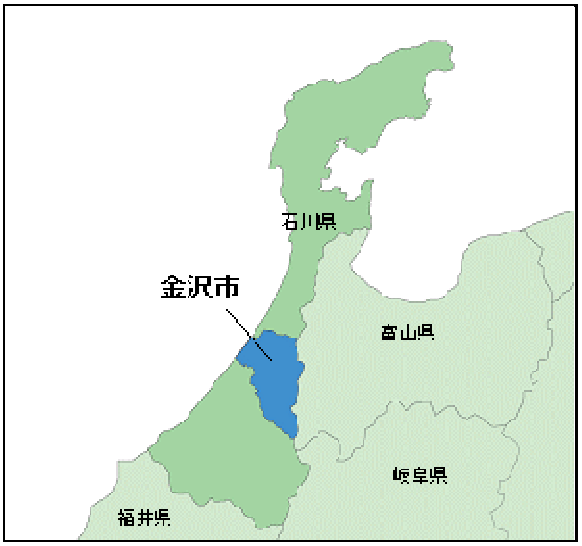
また、徹底した行財政改革の一方で、村に目立つのはさまざまな“箱物”であった。「コスモスの湯」やレストハウス「レスト秋桜」、村立図書館、インドアスポーツセンター、文化芸能交流センター、医療福祉保健総合健康センター、道の駅等々･･･。

国や県の補助金の効率的な活用と、維持･管理費の削減をめざし、村の直接管理にしたとのことであったが、このような施策の取り組みにより、人口減少の時代にあっても、この村は今後も人口は増え続けるであろうと思う。

ただ、地場産業があまり発展していないことが将来に対する課題であると感じた。

【３日目　金沢市】

【基本ＤＡＴＡ】



■位置・地勢

石川県の県庁所在地である金沢市は、日本海に面している北陸地方の中心都市であるため、国の行政機関が多く立地しているとともに、北陸三を商圏とする経済の中心地である。

金沢市の中心市街地は、白山山系から連なる山々を背に日本海に至り、市街地は３つの台地と２つの河川にまたがって形成されているため、坂道が多いなど起伏に富んだ地形を有している。

■人口

１８万５５７４世帯　　４５万７４６０人

■面積

４６７．７７ｋ㎡

■主な産業

農業（米、野菜、果樹）、工業（機械、金属、食料品、繊維）、商業、サービス業、観光業

【視察報告】

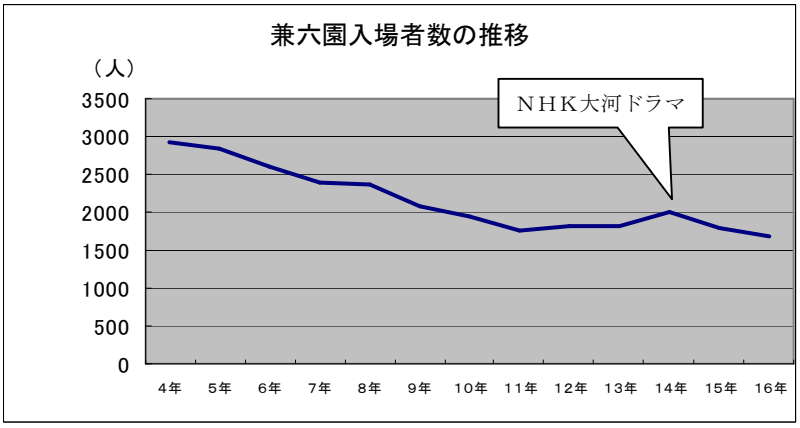
■観光ではメジャーな金沢ではあるが、新幹線開業を見据え新たな観光事業への取り組みを視察した。

▲兼六園　錦秋に映える兼六園のシンボル　ことじ灯篭

＊近年の観光動向

金沢の観光客は年間６００万人を超えるといわれているが、金沢市の名所「兼六園」の平成１６年度の入場者数は、１６８万人で、平成４年と比較して５７．９％と減少傾向にある。

ただし、平成１４年は大河ドラマ誘致を実現し、その効果が現れ、若干観光客も増えた。



また、金沢を訪れるバス利用台数も平成４年時と比較すると４０．６％に減少。しかし宿泊者数は、１３年前とほぼ変わらないという。（年間２１２万台／H16）

宿泊施設も平成４年と比較すると、平成１６年度は３０％程度減少しているが、北陸新幹線開業が決定してから、金沢市中心部で宿泊業の再編が進んでいる。今月に入って老舗旅館が廃業し、年内に地元資本の二施設が姿を消す。一方、ＪＲ金沢駅周辺ではホテル建設が相次ぎ（７社）、客室数が一気に１６００室以上増える。

＊平成１７年度金沢市観光交流事業

①金沢駅東広場オープニングイベントの開催

ガラスドーム（もてなしドーム）、つつみ門の広場の完成に合わせ周辺商店街との連携によるイベント開催。

②もてなしドーム観光発信事業

金沢駅東広場において年間を通したイベントや観光キャンペーンの展開。

③観光宣伝事業

ブランドジャケット広告掲載事業･･･金沢の広告を掲載したブックカバーを製作し、首都圏の書店に配置。

④文化･観光施設事業

ひがし茶屋休憩間管理･･･施設の修復過程等を表したパネルを設置

⑤観光出向宣伝

食の都『金沢』キャンペーン

⑥観光事業促進

中国語、韓国語観光案内事業･･･中国、韓国からの観光客に対応するため、金沢駅内の観光情報センターにおいてコールセンターの通訳を活用した観光案内の実施。

■感想

歴史、文化、史跡、食などが揃った街である金沢でさえも、観光客の減少に苦慮されていた。

しかし、北陸新幹線開通にあわせて、街全体が“新しい金沢”をつくろうと、これまで培った経験と金沢がもつ観光の素材を十分に生かす新たな“仕掛け”をみんなで考えられていた。

また、平成６年７月８日、ボランティア養成のための学校として「金沢ボランティア大学校」を設立し、福祉、環境、文化、コミュニティー、観光の各コースに分かれ、ボランティアをするための基本や幅広い視野を身につけて、継続的にボランティア活動を実践できる人を養成しようと、金沢市の肝いりで、全国の自治体で初めて設立されるなど、市民とともに街づくりを進める意気込みが感じられた。